機関名	所在地と立地時期	機関の類型
（独）家畜改良センター	福島県西郷村 （平成 2 年本所設置）	教育･研究
＜業務内容＞　家畜の改良増殖と飼養管理の改善、調査研究、牛の個体識別、 飼料作物種苗の生産・供給と検査、畜産技術の普及指導と海外技術協力		
＜職員数＞　188 名（その他臨時職員：約 50 名）		

(1) 機関、所在都市の概要、立地の経緯

1) 機関の概要[1]

独立行政法人家畜改良センター（以降、「センター」と表記。）は、明治 5 年創設の新冠御料牧場にはじまり、日清戦争による軍馬育成の必要から明治時代に設立された種馬所や軍馬補充部などを前身としている。以降、畜産事情の変化に対応した統廃合があったが、平成 2 年には、発展の著しい畜産新技術を活用した効率的な家畜の改良増殖等を推進する主体として、農林水産省家畜改良センターが設立され、従来相互に独立していた各牧場が同センターの内部組織として位置付けられた。その際、それまで福島種畜牧場があった福島県西郷村に本所が置かれた。

さらに、中央省庁等改革の一環として、平成 13 年からは、特定独立行政法人に移行し、「家畜の改良及び増殖並びに飼養管理の改善、飼料作物の増殖に必要な種苗の生産及び配布等を行うことにより、優良な家畜の普及及び飼料作物の優良な種苗の供給の確保を図ること」を目的とした活動が行われている。

また、平成 18 年からは、総務省政策評価・独立行政法人評価委員会が示した勧告を踏まえ、非特定独立行政法人（非公務員化）となっている。

平成 23 年 3 月現在、1 本所、11 牧場の体制となっている（次頁図を参照）。

[1]「設立の経緯と変遷」（独立行政法人家畜改良センター）より作成

図１　本所、牧場の位置図

出典：家畜改良センターパンフレット

センター庁舎

中央畜産研修施設

図２　外観

2) 所在都市の概要[2]

明治 21 年の市制・町村制公布の翌年、明治 22 年に西郷村は誕生し、その後 110 年以上経て今日まで一度の分村、合併もなく現在に至っている。

西郷村は、日光国立公園、那須火山帯の赤面山、甲子山の東側山麓にひろがる高原地帯に位置する高原の村であり、また、村の中央を阿武隈川とその支流が貫流し、流域の各所に渓谷美が見られ温泉も湧出するなど自然環境に恵まれている。村の総合振興計画においても「さわやか高原公園都市にしごう」を目指している。

一方で、昭和 48 年には東北縦貫自動車道白河～郡山間（白河インターチェンジ）が開通し、さらに、昭和 57 年には東北新幹線大宮～盛岡間が開業（新白河駅の開業）するなど、以前から交通至便な地域であることから、企業立地が進んでいる。主な立地企業としては、白河オリンパス(株)、日本工機(株)白河製造所、信越半導体(株)白河工場、富士システムズ(株)、エレクトロテクノ(株)新白河工場、三菱製紙(株)白河工場などがある。

また、国勢調査による夜間人口でみると、昭和 45 年以降一貫して人口増加を続け、直近では平成 17 年 19,464 人から、平成 22 年 19,769 人と増加した。企業立地の進展、人口増といった状況から、西郷村は平成 17～平成 21 年度において地方交付税の不交付団体だった。

このように西郷村は交通条件や良質な水源に恵まれるなどから、企業立地が進み、大型商業施設（ジャスコ）が進出し、また JRA 場外馬券売り場、山間部には自衛隊演習場があるなど、村財政にプラスの影響、雇用の場の確保がなされている。

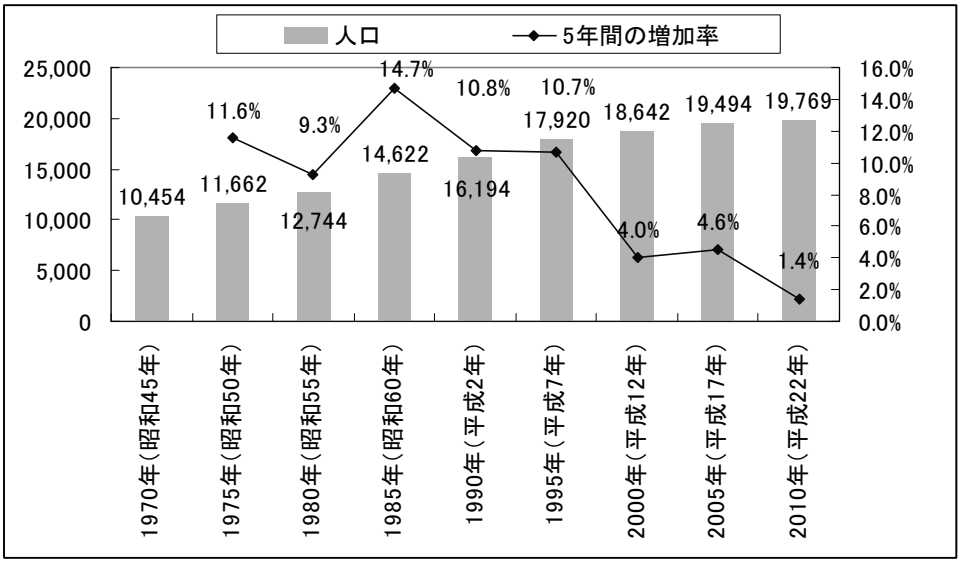

図３　西郷村の人口の推移

資料：総務省国勢調査より作成

表１　所在都市の概要

市町村名	人口（人）	面積（k ㎡）	人口密度（人/k ㎡）
福島県西郷村	19,769	192.32	102.8

資料：人口：平成 22 年国勢調査速報値（総務省）、面積：平成 22 年全国都道府県市区町村別面積調（国土地理院）

[2] 「西郷村第三次総合振興計画」（西郷村）などから作成

3) 機関の立地の経緯[3]

明治 32 年、福島種馬所として現在の場所に設立されて以来、戦時中は軍用馬育成のため、戦後は畜産振興のため国の牧場として立地していた。平成 2 年に全国 17 の種畜牧場を再編・統合し、農林水産省家畜改良センターが設立された際、東京への近接性等の理由で、福島種畜牧場があった西郷村にセンターの本所が置かれた。

(2) 特徴的な取り組みの経緯、効果

1) オープンスペースの提供、常時牛、馬等へのふれあいの場の提供

・センターは、センター法に基づき、全国の畜産農家等を対象に、家畜の改良増殖と飼養管理の改善、調査研究、牛の個体識別、飼料作物種苗の生産・供給と検査、畜産技術の普及指導等を行っていることから、関係する畜産農家を除けば地元と直接関わるものではない。また人獣共通感染症対策等のため家畜エリアや個人情報保護等のため業務エリアへの関係者以外の立ち入りを厳しく制限している。

・このような状況の下では、センターの業務内容を地元の方々に十分理解してもらうことは困難な面があることを踏まえ、センターでは、研修施設、業務施設等の周辺緑地帯等の敷地をオープンスペースとして積極的に提供するとともに、地元の方々が立ち入ることのできる家畜園を整備し、常時牛、馬等と触れあえる場を提供している。

・西郷村からみると、企業立地も進んでいる交通至便な地区にセンターが立地していることについて、経済効果という面での期待よりはむしろ「さわやか高原公園都市」に合致したオープンスペース、景観等を提供する地域の有効資源としてのメリットを見出している。

笑顔と活力あふれる「さわやか高原公園都市」づくりを目指し日光国立公園の甲子温泉、阿武隈川の源流、楽翁渓の景観など、自然に囲まれた西郷村は西に秀麗な那須の峰々を見る高原公園都市づくりを目指しています。

四季の姿の中に広がる田園風景、そして、広大な敷地のなかに那須甲子少年自然の家や家畜改良センターなどがあり、自然の雄大さを満喫できます。また、里山の中に最新鋭工場が稼働しており産業面での発展も期待されています。

新幹線通勤圏、環首都圏内のすばらしい環境を誇る村として、皆様のご来村をお待ちしております。

西郷村長　佐藤　正博

出典：西郷村ホームページ「村長からのメッセージ」より

[3] 家畜改良センターヒアリングより

具体的取り組みとその効果は以下のとおり。

① オープンスペース等の提供

人獣共通感染症対策、個人情報保護等の観点から立ち入り制限を行っている施設を除き、建物敷地は出入りがオープンとなっており、広く落ち着いた散歩コース、いこいの場を提供している。また、ふれあい家畜園を設置・開放し、常時牛、馬等に触れられる場を提供している。

＜西郷村の担当者の声＞

- 牧場のおかげで、地方でもなかなかない開放的で子供たちが自由に入っていける広い野原のイメージでのオープンスペースが地域住民に提供されているのではないか。
- センター敷地は日中の保育園等の散歩のコースにもなっている。児童を対象とした写生会でも活用されている。野球場等も場合によっては貸して頂ける。
- このようにセンターの敷地を地域住民のために使わせてもらって有り難い。

＜センターの担当者の声＞

- 地元の子どもたちが家畜とのふれあいができるよう、展示施設と広場を作った。近隣の幼稚園、小学校の散歩コースとなっており、写生会なども開催されている。

② ふれあいまつり

平成12年頃から地元の方々を呼んでふれあいまつりを毎年10月第3日曜日に開催している。毎年近隣市町村も含めて 7,000 人が来所している。主眼はセンターの業務紹介であるが、グラウンド、駐車場に出店をだして楽しんでもらうこともしている。業務内容等の紹介の内容は以下のとおり。

1）家畜改良センターおしごとコーナー

○センターで作られた家畜の紹介

○ 遺伝子解析、受精卵移植などの畜産新技術の紹介

○ 牛の個体識別制度（トレーサビリティ）の紹介

○ 来場者が無料で参加できるＤＮＡ抽出実験、クローバーの押し花カード作りなど実験・体験コーナー

2）動物とのふれあい

○ 家畜園、体験乗馬など子供たちへの動物とのふれあいの場の提供

○ 模型を用いた搾乳体験コーナー

3）農機具の展示

○ 最新の畜産関係農機具の展示

4）模擬店・アトラクション

○ 模擬店の設置や管内関係機関、団体等の協力によるさまざまなアトラクション

5）その他

○ 畜産関係団体による情報提供やアンケート調査の実施

＜西郷村の担当者の声＞

・　ふれあいまつりは村内でも人気があるイベント。

・　最近はこのような農地の多い土地でも小さな子が牛、馬と触れ合う機会をつくるのが難しく、貴重なイベントである。

・　村にはもう 1 つ商工会による祭りもあるが、ふれあいまつりのほうが、敷地も広く子供が大勢来ることができるので、人気がある。

＜センターの担当者の声＞

・　西郷村では規模的に一番の祭りだろう。開始時刻前から会場に人が集まってくるほど地元の人達に喜ばれている。西郷村だけでなく、白河市、栃木県側の町からも人が来ている。

③ 外国研修生と地元小学生の交流機会の創出

家畜改良センターに滞在している海外研修生が、近隣の小中学校を訪問し、児童・生徒と交流している。

平成 9 年から年に 2 校程度、1 校あたり 100 名程度参加している。交流会は学校側からの要請に基づいて実施している。

＜西郷村の担当者の声＞

・　子供たちにとっては外国の文化と触れる機会は普段なく教育効果として大きい。

④ 業務活動を通じた地域への経済効果

・職員が西郷村に居住することによる税収面での効果、臨時職員が地元雇用の増加につながっている効果、さらには、全国の畜産関係の国・県・団体の職員を対象とした研修のほか、企業研修や海外からの研修派遣に対応していることから、年間 2,000 人が全国から西郷村に来村しており、研修生の村への入りこみによる地域への経済効果がある。

・ただし、村内に工場立地が進んでいるなか、そうした民間施設の立地と比べると経済効果として大きいものではないとの声もある。

＜西郷村の担当者の声＞

・　地元での雇用の面での恩恵はある。具体的には、牧場の現地スタッフ、事務補助としてのパートタイマーである。

・　飼肥料の調達等において、村内の業者との大口の取引はないだろう。郡山が多いようだ。村内との取引がもっとあるとよい。

・　村内に居住している職員からは住民税が入ってくる。ただし、他の施設が立地していればより税収が入ってくる可能性はある。

・　民間の施設があれば固定資産税も含めてもっと入ってくるので、雇用のほうでメリットがないと厳しい。

＜センターの担当者の声＞

・　国の独立行政法人ではあるが、センターの設立の経緯、業務内容等から地元出身者も多く、

180 名のうち 4 割弱を占めている。OB も含め地元に住居を構えている者も多く、家族を含む関係者の消費活動・居住等により、相当の経済効果や税収効果が見込まれる。

- 公募により、近隣市町村から非常勤職員（パート）を 50 名程度雇用している。
- 全国に配置している 11 牧場の業務運営に必要な運営費交付金、自己収入等を地元金融機関で一括して管理しており、その経済効果は大きいものと思料する。
- 研修施設は、最大 80 名が宿泊可能となっており、稼働率も高いことから、全国から集まる研修生の近隣の小売店、飲食店等での消費活動は地元の活性化に寄与している。
- 業務に必要な肥飼料や医薬品の調達先は、独立行政法人の会計規程に基づく入札の結果として決まっており、地元のみを優遇できない。